

アルバート・ジョンソンへ宛てたコウトクの手紙

ヒッポリート・ハヴェル

(1911年8月号)

犠牲になった日本の同志達の好ましい回想の一つは、彼等とヨーロッパ及び米国在住の急進派の人びととの友情である。その中にレオポルト・フレッシュマンとカリフォルニアの老練なアナキスト、アルバート・ジョンソンがいた。レオポルト・フレッシュマンのお蔭で、デンジロ・コウトク、T・サカイ、セン・カタヤマ、カトウ博士等それに他の多くの人びとが米国での社会闘争において親密になった。またフレッシュマン氏を通して、デンジロ・コウトクはわれわれの旧友アルバート・ジョンソンに出逢った。この知己はすぐ友情に成熟し、コウトクが日本へ帰ってからもつづいた。彼等の親友の成果は、現在、長い手紙の形でわれわれの手許にある。私はこれらの貴重な手紙が「近代文学」のレオナルド・アボット氏によってもたらされ、「大地」誌の読者に提供できるのは、大変幸いである。

ここでは手紙に書かれた通りを復原した。編集するのは、その魅力と簡潔さを損うからだ。誰でも容易に判るのは、デンジロ・コウトクが社会革命軍に参加し、思想家、闘士、組織者として人間解放の運動にことごとくを捧げたということである。

手紙の重要な価値は、コウトクがアナキズムへ自己発展したこと、またその理由を語っていることである。ヨーロッパと米国において要素として働いた経済及び社会条件が明白に日本に於いても同じ力となり作用している。われわれと同じく、日本人は等しい緊急問題の解決を迫られている。

デンジロ・コウトクは深刻な哲学問題に従事した学者であった。ルナン、ストロス、ブルクボウエルのように、わが同志は最後の刑務所入りの間にも、キリス

ト教に対する厳しい批判の労作に捧げていた。正に同じ時期にイエスキリストに
ついでにドリス教授の労作がドイツと日本に於いて、あのような熱狂を引起した
のは奇妙な偶然の一致であろう。日本のアナキスト思想家は日本の刑務所内で、
死にみこまれながら同じテーマを取り扱っていたのだ。

○ ○ ○ ○ ○

1904年11月25日 トウキョウ、日本

A・ジョンソン様

新愛な同志

貴方から送られた写真を複製し、社会主義者の週刊紙、ヘイミンシンブン社から
発行されたとお伝えするのは大変嬉しい。私は反権論説を発表したカドで告発
され、5ヶ月の下獄の宣告を受けました。この草案がお手許にある頃、私はトウ
キョウ、スガモ刑務所に居るでしょう。

敬具

コウトク

*写真はクロボトキンのもの

◇ ◇ ◇

1904年11月30日

A・ジョンソン様

親愛な同志

返書にあたり貴方に感謝致します。貴方が送って下さったクロボトキン氏の住
所と多くの貴重な文献は受領しました。

ラド氏の著作「ユダヤ論」は、議論と参照の原典として私には貴重です。何故
なら私は、無神論者または不可知論者として、キリスト教やその他すべての宗教
と常に闘ってきた者だからです。

私は亡くなったハーン氏（訳註ラフカディオ・ハーンのこと）の著作は読む機会がありませんでした。しかしそれは立派な権威あるものだと思います。彼は死に至るまでの長い年月、完全な日本人の生活を送ってきたからです。

既に申しあげたように、私は野蛮な政府によって、君主制の变革を煽動した科（カド）で告発され、5ヶ月の刑を宣告されました。すぐ上告して、その第3回公判は、1月6日まで延期されました。

この他、今月20日には、マルクスの“共産党宣言”を翻訳し出版した科で、80円の罰金刑を受けました。日本政府は何と立派なんでしょう。ロシアの専制主義と全く変わらないのではないのでしょうか。

敬具

D. コウトク

~~~~~  
1905年8月10日 オダワラ

A. ジョンソン様

親愛な同志

7月16日付の貴方の手紙を受取り、それを妻に訳し聞かせ大いに楽しみました。彼女は貴方の友情と親切に感謝し、熱心に聞きほれていました。

貴方の一番末のお嬢さんが最近ご主人を失われたのには同情の涙を禁じ得ません。また貴方がご家庭で、私の出所を祝い晩餐を催して下さったとの由を知り感謝します。

8月6日、私達はトウキョウから南西約50マイル離れたオダワラの海浜へ、私の健康回復の為に参りました。私達が現在滞在している建物はカトウ博士所有の別荘です。この人は社会主義者で、私の病気を親切に気遣って呉れています。

5ヶ月の入獄は私の健康を少からず損いましたが、社会問題の多くの課題を私にもたらしめました。私は所謂大勢の“犯罪者”を見て研究し、政治制度——法廷、法律、刑務所等——こそ貧困と犯罪の責任を負うものだと確信致しました。

私が刑務所で読んだ多くの本の中には、ドレーパの“宗教と科学の衝突”，ヘッケルの“宇宙の謎”，ルナンの“イエスの生涯”等がありました。この他、貴方が送って下さったラド氏の“ユダヤとキリスト神話”，それにクロボトキン氏の“田園，工場，作業場”の2冊は繰返し読みました。（ところでラド氏は仏陀がシナの哲学者だと再度指摘しているが、仏陀またの名ゴータマはシナ人ではありません。彼はインドに生まれたのである。ヒンズー人でした。仏陀の死後、数世紀経て、彼の宗教はシナに輸入されたのです。）

実を申せば、私はマルクス派社会主義者として入獄しましたが、急進派アナーキストとして出獄しました。しかしこの国でアナキズムを宣伝するのは、死刑または終身刑、少くとも数年の刑務所入りを意味するのです。そこでその運動は完全に秘密でなければならず、その発展と成功には、長い長い時間と忍耐を要するのです。

私は現在次の目的のため、数年間、米国とヨーロッパで暮そうと考えています。

- (1) コミュニスト，またはアナーキストの国際運動にとって、最重要な手段である外国語会話と作文を学ぶこと。私は英語の文献は読めますが、話せません。そこで英文を書くのはご覧の通り大変な苦勞です。
- (2) 多くの外国革命家の指導者を訪ね、彼等の運動から重要な事を学ぶこと。
- (3) “陛下”の地位及びその政治，経済，制度を、この“陛下”の悪辣な手の届かぬ外地から批判すること。

もし私の健康が許し、親類、友人から借りられる金がまとまれば、私はこの冬または来年の春、出発する積りです。

われわれは現在、オダワラにいますが、来月、トウキョウへ帰ります。

敬 具

デンジロ・コウトク

追伸

妻は、あなたの手紙に同封されていた、沢山な写真をいたく喜びました。



1905年9月6日

親愛な同志

ケルソの「政府分析論」の送本は昨夜落手、深謝致します。すぐ著者の序文を読みました。これは非常に貴重な本だと思えますし、政府の悪業から多くの事柄と、それより招来されるアナキーの善いことについて学ぶでしょう。

私の健康は日を追って回復しています。それ故、来年11月には米国へ向け出発する積りです。草々

D. コウトク

ラド氏の論文、「日本は世界を指導する」をサーチライト誌7月号で読みました。



1905年9月8日

親愛な同志

日本政府は、自分達の手で煽動した愛国主義、好戦主義の当然なしかし酷い成果を受けています。最近4日間、<sup>\*</sup>トウキョウ市は火と血の海に沈みました。戒厳令が発令され、多くの出版物は禁止され、郵便局員はどんな手紙でも開封する権利が与えられています。

D. コウトク

\*ポーツマス平和条約の調印による好戦的デモ。

1905年10月11日

親愛な同志

われらの週刊紙は、未だに発禁になり、わが社は野蛮な迫害と財政的困難によって、解散を余儀なくされています。

私は現在、米国内の日本人労働者を組織する積りです。最早、戒厳令のしかれた土地を離れ、もっと文明化した国へ行く他、言論と出版の自由を獲得する方法はないのです。

〔訳註〕週刊誌は「直言」のこと。

D. コウトク

1905年10月11日

親愛な同志

書物と文献の送付を受け感謝致します。われわれは、外国婦人と子供達の写真に接し、喜ばしく思いました。私は11月14日、シャートル、サンフランシスコ向け日本郵船の船で出発します。

12月初め、貴方や同志の皆さんと、握手できるのは大変な喜びであり幸福です。

D. コウトク

アルバート・ジョンソンへ宛てたコウトクの手紙  
(つづき)

(1911年9月号)

5月29日午後5時、サンフランシスコ

親愛な同志

本日(午後)ここへ到着しました。貴方の所在が不明で、訪問できなかったのは残念です。私は漢文で別離の詩を作りました。それは古典の形式です。詩はシナ語の新聞に書いたものですが、貴方に送りましょう。明日投函します。宛名はアナ・メダになっています。

オークランドには6月1日まで滞在します。その日はオークランドの社会主義者事務局で日本社会革命党の結成式をあげます。

革命に向う貴方へ、

D. コウトク

\*コウトクの米国滞在数ヶ月であった。彼は太平洋岸で日本人労働者を組織化し、宣伝活動の継続のため故国へ帰った。(H. ハーヴェル)

~~~~~  
1906年12月18日

親愛な旧友・同志

冬がきて木の葉が落ちています。それでも非常に好天気です。空は青く、太陽の光は暖かい。私は田舎家で至極幸福です。

妻は今朝、同志オオスギの公判の傍聴にてかけました。同志オオスギは若いアナキスト学生だが、私の最良の友人です。私がサンフランシスコに居た頃、彼

は貴方に仏文で手紙を書き、ラド夫人がそれを翻訳して呉れましたね。覚えていますか？さてオオスギ君は今只“新聞紙条令違反”で裁判されているのです。

彼はフランスのアナーキスト新聞から“新兵諸君に与う”の論説を訳し、日本社会主義者誌“ヒカリ”に発表しました。この反軍国主義の行動が、当局によって迫害されたのです。私は裁判の結果を知りたく思っています。思うに数ヶ月の入獄と印刷機の没収でしょう。法律や政府は立派なものです。

先の戦争（日露戦争）の成果で、最もお可ましい出来事は、キリスト教と仏教及び神道の和解である。日本に於けるキリスト教の歴史は、これ迄恐ろしい迫害の歴史でした。しかし日本の外交官達は、戦時中ヨーロッパに拡がった“日本は黄禍である”または“日本は異教国”との噂を打消すのに熱中して突然、西欧文明の仮面を被り、文明化したキリスト教国としてヨーロッパと米国の勢力に日本を紹介する手段に用い、キリスト教を熱心に歓迎し保護したのです。一方キリスト教の牧師達は、政府の弱点を利用し、米国から多額の金銭的援助を受け、その庇護の下に、愛国主義の福音を全力あげて宣伝したのである。かように日本のキリスト教は、戦前、貧しい者の宗教であったものが、僅か2年のうちに、文字通り大きなブルジョワ宗教、国家機能、軍国主義に変わったのです。

社会主義者の日刊紙の準備は大体完了しました。私はこの日刊紙の成功を望んでいます。日本社会党は、ご存知のように、多くの異質分子で成立しています。即ち社会民主党员、社会革命党员、またキリスト教社会主義者さえいるのです。そこでこの日刊紙は至極風変わりな新聞になるでしょう。

わが同志達の多くは、サンジカリズムやアナーキズムより議会主義の戦術を執りたがっています。しかしそれは真理を確信するからではなく、アナーキスト・ Kommunismus についての無知によるからなのです。それ故、われわれの現状での最重要な仕事は、アナーキスト及び自由思想の文献を翻訳し発行することです。私は全力を尽します。そしてわれわれの機関紙をリバタリアンの宣伝のための機

関紙に活用します。

シナでは反乱と蜂起が拡大している。シナの社会的政治的状況は前世紀のロシアのそれと同じです。思うにシナは10年以内に大きな反乱とテロリズムの国になるでしょう。トウキョウ在住のシナ学生グループはシナ革命の中心になりつつあります。

敬 具

D.コウトク

〔訳註〕1907年1月15日に創刊された日刊平民新聞の準備を報告。

1907年5月3日 ユガワラ、サガミ。

親愛な同志・友人

長い間、手紙を書かなかったことをお許し下さい。最近数ヶ月私は非常に忙しかったのですが、これは政府の迫害によるものでした。只今、われ等の日刊紙は発禁され、多くの同志達が刑務所へ行きました。私には仕事や事業もなく、そこで手紙を書く暇ができたのです。私は今、独りで、トウキョウから日帰りの距離にある有名な海浜、ユガワラの宿にいます。ここへは私の健康を増進するために来たのですが、アーノルド・ローラのパンフレット“社会的ゼネスト”を翻訳しています。

反軍国主義、コミニズム、またその他ラジカリズムについて私のエッセイを集めた本は発禁になり、数多くが政府によって押収されました。しかし巧妙な出版人が、警官の来る前に1500部売りました。

ヤマノウチ夫人は、トウキョウ近辺の田舎家に、彼女の母及び祖母と一緒に住んでいます。彼女の家族は豊かですが、彼女は独立した生活を営む準備をしているのです。彼女が言うには、寄生生活に堪えられないそうです。私は彼女に仕事を探しています。妻とマガラ・サカイは貴方が呉れた美しい絵葉書を非常に喜び

ました。彼女（マガラ）は4才ですが至極可愛い子です。

貴方はパークレ在住の日本人学生に逢いましたか、彼等は雑誌を発行して去年1月一大センセーションを引き起こしたのです。彼等はみな賢明で、リバタリアンに挺身しています。日本の未来の革命は彼等の手によって成るのを希望しています。どうか彼等に教え、教育し、指導してやって下さい。

サカイ氏は数人の若い同志達と“社会問題百科辞典”にとりかかっています。その完成は、この後5、6ヶ月かかるでしょう。わが同胞の教育には、大きな効果がありましょう。私はクロボトキンの著作を訳します。

貴方の眼の容態は如何ですか？ 眼は人間にとって非常に大きな器官です。ご注意下さい。お嬢さんとお孫さんによろしくお伝え願います。 敬 具

D. コウトク

（この稿つづく）

国 際 情 報

（1911年9月号）

日本に於ける現在の反動は社会主義者、アナーキストだけでなく、現代の作家達にとっても荒廢になっている。米国と英国で知名な作家ヨネ・ノグチ氏（註野口米次郎・詩人）はロンドンアカデミーに日本での文芸人に対する酷い迫害について書いている。

「もし作家や文学にとって最も不親切な国があるとすれば、それは日本——少くとも現在の日本である。戦争（註日露戦争）以来、特に最近の3年間、日本政府は2つの目的をもっていた。即ち社会主義と“自然主義”を根絶やしにすること。この両者は、完全な個人主義を主張するからである。私には国がその目的に

宛て、警察と新聞出版物の総力を、活用しているように思われる。事実、多くの作家達は、アナーキストと同じく道徳的にまた社会的に危険だと考えられている。政府は彼等に警察をけしかけるのである。」

ノグチ氏は、日本人の愛国主義の神話を排斥して言う。

「日露戦争において、日本の愛国主義の均質性を見るなら、それは皮相な観察者のやることだ。古代の剣のすまじい輝きと共に、あの主義はかげりに過ぎなかったと言うなら正当である。むしろ西欧の個人主義の要素が、戦時にその所在を明瞭にしはじめたのだ。新しい日本人は別の観点から、愛国主義の意味を規定しようと試みたのである。最近、有名な反逆事件の首謀者として絞刑されたコウトクとその他の人びとは、反戦の叫びをあげた。われわれは多くの、公けにならない、しかも直ちに軍法会議にかけられた脱走兵士の話を知っている。ある批評家達は西欧人が戦争に結びつける日本人の勇敢さを否定してさえるのだ。もしわれわれが、自分達の物語を語ったら西欧の読者が、驚くのはあやしむにあたらない。」

この作家は興味深い論文を次のような抗議と警告の言葉で結んでいる。

「時代は変る。だが時代の変化を理解せず、それどころか、その存在を否定さえする政府にとって、どんな結果が訪れるか、私は容易に予言はしない。」

☆

☆

☆

日 本 の 現 状

M・ジャルイ（1911年10月号）

日本では完全な民主化に向う傾向が、徐々にすすんでいる。それは最近の工場法の成立によってもあきらかである。この法律は、女性と子供の労働保護を目的

としている。また成年男子選挙権は先の議会で日本の衆議院を穏やかに思いがけなく通過したが、貴族院で葬られた。これらの事柄は、日本の支配階級が大衆の権利を完全に認める方向へ確実にすすんでいるのを示すものだ。日本の大衆は、自己の権利を肯定する点では、西欧の兄弟達よりはるかに遅れている。しかし教育を受けた人や進歩的政治家は、どんな目的とするのかは疑問としても、大衆運動をすくいあげている。

これに関連してコウトク事件は日本の大衆の中で、非常に深い関心を呼んだ。もっとも世界の他の方面で、広く関心をもたれたのとは幾らか意味が違うようだ。コウトクと彼の仲間達は、当局の血眼をできるだけ避けていた。しかし、最後に時節が来たと知ると、彼等は自己の原理と確信を法廷の前で率直、大胆またあからさまに陳述した。彼等のものに動じない、静かな恐れ気のない態度は、弁護士達と法廷の賞賛の的となり、法廷の看守の一人は深く動かされて精神異常を来たした。

しかしコウトクのラジカルな運動は、彼と彼の仲間が生命を捧げた運動の将来性を、増進しないばかりか、むしろ好ましくない影響をもたらした。政府は運動の芽を摘み、その目的のためには、厳しい反撃手段に訴え始めたのである。しかも民衆は、その歴史と伝統が、皇室に対する献身に強く結びあわされているので、コウトクの理念に叛いた。西欧の観点からは、多少特異でむしろ奇妙でさえあるが、日本人はほぼ3000年来、天皇に対する忠誠を倫理の根本とし、それは妻子への愛情、否両親への愛情に勝るものとしている。かような民衆にとって、コウトクの理念は、所期の効果をあげないばかりか、少くとも現状では、単に叛意を起こさせるばかりであった。

コウトク事件の法廷手続に関し、西欧人人士の間で誤解がある。この誤解を日本への公平と正義のために私は取除こうと思う。この事件のために特別法廷が作られたとの考えが一般である。だがそれは真実ではない。1890年に成立し今日

でも有効な法廷設立法(§50 細目)によれば最高裁判所は、皇族の構成員の身柄についてのすべての犯罪、大逆罪、及び皇室の構成員による犯罪には唯一の排他的審議を行なうと規定されている。この法律によって、コウトクと彼の仲間、最初から日本の最高裁判所で裁かれたのである。更に西欧での一般の印象とは異り、この裁判は完全な秘密ではなかった。公衆は裁判の大部分から排除されたが、裁判中、外交官、判事、政府のあらゆる部門の高級官吏達、実務弁護士達は出席を許されていた。なお被告達は12名の選出弁護士の相談を受ける恩恵も受けていた。これによって日本の大衆は、所謂手続の不定期性には一般に理解があったが、外国人の間ではそれが非常な不評を呼びおこしたのだ。

コウトク事件はそれぐらいにしよう。事実、事実だけ述べたのである。

私はこの文章の初めて、日本では完全な民主化が現に傾向性としてあること、そして民衆の権利の漸進的な承認の傾向にあるのを述べた。その進展は若い熱狂者達の希望をことごとく叶えるものではないにしても、事柄の正しい方向を見失ってはいない。

日本の支配階級は、現状での自己の危険性を素早く読み取り、民衆の幸福のためというより自己防衛のため、社会改造を上手に採用した。その1例がここで指摘するカツラ侯であるが、この首相は、慈善協会を作り、サイセイ会と名付けた。この会の目的は、貧民に治療し無料で薬を呉れるのだ。官庁の圧力が金持の負担として強くかかったのは真実だが、全般にこの協会の資金への募金の呼びかけは立派に答えられ、現在2000万の資金が既に全部充足されているのだ。更に政府は、産業保険の形で救済を構想して居り、これは労働階級の利益を保護し、彼等の老年まで保護を及ぼすものだ。人びとの間では採用する方法論とか意見で異り、また反対の批判も各方面から提起されている。しかしその精神は政府でも反対派でも同じで、つまり大衆の水準を引上げ、これまで認められていなかった人びとの社会的政治的条件を改良することにある。かかる仕方では日本の上層部は被

抑圧階級の目覚めをせ止し、自己の邪悪な特権を確保しようとしているのだ。かかる仕方では、所謂社会政策または古くさい国家社会主義の手續きを発効させ、必然な流れをせき止めようとしているのだ。彼等の奸計が酷いものであり、それが奇怪な程愚かであっても、コウトクと彼の仲間達はかような変化をもたらしたのだから、彼等は決して無駄死したのではない。

結論として、私は言うが、大衆の経済的条件の重圧は堪えがたく、現時ほど自由と経済解放の福音をのべるのに重要な時期はないと思う。だがここでわれ等は幾つかの障害にぶちあたるのだ。その第1は、民衆が非常に自己の権利を認めるのに遅れて居り、上層階級は大衆を低くとどめることにおいて至極賢く奸智にたけていること。第2に、政府の迫害——これはコウトク事件の一時的な反動かも知れないが——それによってこの方面で何もできないこと。第3に、日本では金持と貧乏人が米国やヨーロッパにおいてのように明瞭に発言されていないこと。第4に、民衆は抑圧と生存の悪条件によくならされ、例えば金持が自分達を犠牲にして太っても自分の不幸な当りくじに不平をこぼさないこと。第5に、民衆は支配者に対する伝統的な感情によって、自分自身の解放のための運動を嫌がること。事情はこの通りだから、彼等の眼覚めは当分出来そうにもない。下層階級の条件は一層悪くなるばかりだ。同志達は、日本のかような条件を記憶され、日本の労働階級の解放と彼等の幸福増進のための方法・手段を思案されるよう希望する。